

「鉛筆を削る」

山口県 海潮寺副住職 木村延崇

小学校に通う息子は、毎日宿題が終わると、あしたの時間割を確認しながら、ランドセルに教科書やノートをしまいこみます。そして鉛筆を一本一本確認して、鉛筆削り機でちゃんと削って筆ばこにおさめます。あるときそんな息子の様子をみながら「お父さんが子供だったころは、鉛筆はナイフを使って削っていたんだよ」とはなしました。小学二年の息子は、はさみ以外の刃物をまともに手にしたことがありません。想像しただけでとても恐ろしそうだ、といたそう顔をしました。

みなさんも幼かったころ、ナイフで鉛筆を削ったことがあれば、よくおぼえていることでしょう。はじめはおそるおそるナイフをあつかい、かといって力を入れすぎると芯はすぐ折れてしまいます。きれいに先を尖らせるためには、繊細な「指さばき」が必要です。文字を書くことは、極めて人間らしい行動のひとつといえるかもしれませんが、そのためには鉛筆を削るという一手間を必要としました。

鉛筆は自分の身を少しずつ削り、文字が書けなくなるまで短くなると、新しい鉛筆にその役を譲り、みずからの使命を終えます。ですからムダにならないように、できるだけギリギリまで大切に鉛筆を使ったものです。それはまるで私たち人間、いいえ、あらゆる生命の生きざまとそっくりではありませんか。

今では鉛筆削りは電動が主流ですから、誰でもきれいに先の尖った鉛筆が目の前にあらわれます。しかし私たちの周りでは鉛筆を使う機会は減り、筆記用具の主役はシャープペン、ボールペンへと様変わりしました。そんな時代ですが、いまだに多くの小学校では鉛筆を用いることになっているようです。

鉛筆が削られる様を通して、人さまのために身を削る尊さに思いを馳せることも、大切な人間教育ではないかな、と思っています。